

「問い」をもって「学び」を求めること — どうやって「高校時代の学び」から抜け出すか —

特任教授 田 中 重 好

大学で学ぶには、これまでの「学び」のやり方を変えることが大切だ。

大学生になっても、学生たちは、当然のことながら、自分のこれまでの高校までの「学び」のスタイルの延長上にある。それが、「常識」であり、習い性になっている。これまで大学で教えてきて、いつも、学生に、「そのやり方は高校生までのやりかたで、大学では違う」と、つぎのように述べてきた。

第一に、高校生までは、一方的に「静かに」授業を聴くというやり方。ある小学校では、両手を腰の後ろに回し、背筋を真っすぐに伸ばして授業を聞くという指導をしていると聞いて驚いたことがある。日本の高校までの授業は、双方向的な授業のやり方を大事にしてこなかった。また、自分の意見を口頭発表することが少なかつただけではなく、文章として書いて発表する機会も少なかつた。授業は先生から情報を一方的に与えられ、自分の考えをまとめたりする必要がないのである。大学生になって、突然、「主体的な学習」が必要だと言われることになる。だが大学にゼミ形式の授業があるのは、そうした双方向的な、みんなで一つのテーマをめぐる議論を交わし、そこから「新しい発見をすることだ」と、教えてきた。とはいえ、日本では高校までこうした討論形式の授業がなく、さらに、日本には伝統的に、「出しゃばらない」（過度な自己主張はしない）、「出る釘は打たれる」（あまり自己主張を強くすると嫌われる、批難される、仲間外れにされる）、「そんなことも知らないのという目で見られる」といったメンタリティというか、文化があるために、実際には、こうした討論形式の授業はなかなか成り立ちにくい。それは、いくつかの大学で教えてきて、いつも、そう感じてきた。だが、討論や対話から「学ぶ」ことは重要であるし、そのことは、大学卒業後も同じである。だからこそ、大学時代に、討論や対話、あるいは、何気ない会話のなかからも、さまざまなことが「学べる」という経験は貴重なのである。

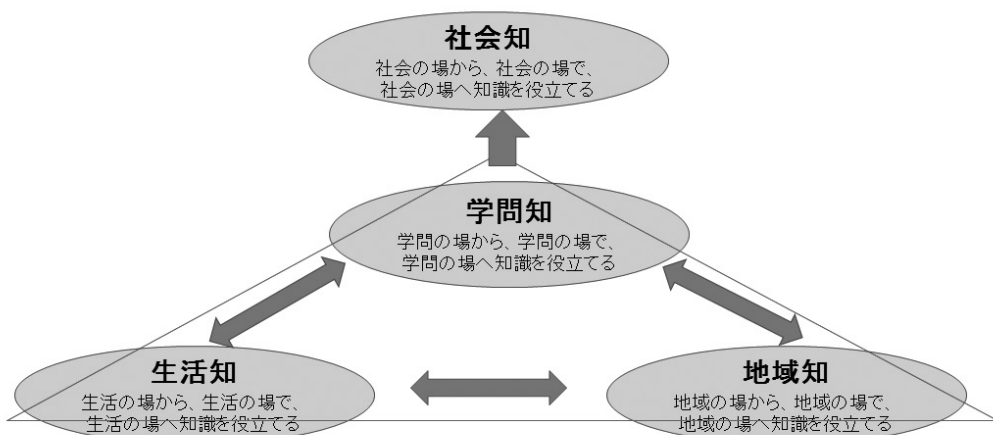
第二は、先生が「問いを出して」、学生が答えるという方式。高校では、学期末試験などで、問題を出されて、それに「間違えなく答える」ことで、成績が決まってきた。いわば、先生が出題し、学生が制限時間内に「間違えなく」答えるということ、を、繰り返し訓練されてきた。これに対して、大学では、「自分で問いをつくる」、その「問いを作る力」が重要だと指摘してきた。その時、よく紹介したのは、柳田國男の次の言葉である。「問によって求むる知恵を得るのが学問であった。…学を漢語のマナブという日本語を宛てた。マナブはマネル、マネスルも同じ起りこりで、師匠のいふ通りを口移しにいふことであり、勿論『学』という語の本義ではない。学は學と同じで、オボエル、オモフとも一つである。自分が新たに考え出す、つまりサトルこと、賢くなることなのである」（『現代科学ということ』『柳田國男 定本』31巻所収）。そして、「問によって求むる知恵を得るのが学問」であるためには、自分で「まず、問いを持つ、あるいは、問いを作らなければならない」、「問いは決して他人から与えられるものではない」と、学生に教えてきた。

第三は、答えには高校までは「一つの正解」があったということ。大学の研究のなかでは、「答えは一つではない」し、「正解は一つの答えしかないわけではない」。

第四は、社会調査の授業などを通して、高校時代までの「調べ学習ではいけない」ということ。社会学では、実際の社会現象を対象とした社会調査の授業が大切で、その能力をつけないと卒業論文が書けない。その社会調査は、なんでもかんでも、自分が設定したテーマに関する事柄を「調べて」、それをまとめて書くことではない。「調べ学習は高校生までだ」。大学生のやるべきことは、自分の「問い」をどう解けるか、そのために何を解明しなければならないか、その解明のために、実際の社会現象をどういった枠組みで切り取り、どういった手続きを経て調査分析するのかを、調査設計することである。そして、最終的に何が分かったら「うれしいのか」、考えることが大切だといってきた。

もちろん、以上のことは、そう教えて、すぐに学生ができるわけではない。

こうした「学び」を進めてゆく上で必要だと思うのは、自分の生活のなかから「学びを出発させること」、同様に、自分の生活している地域から「学びを出発させること」である。その二つの「学び」と、学問の「知」を結びつけることで、本当の学びを進めてゆくことができるのではないだろうか。さらに言えば、そうした生活知、地域知、学問知の相互に関連させた知の上に、本当に社会に出て「役に立つ」知が形成されるのではないだろうか。この点をまとめて、以下のような図を作って、学生の説明している。



さらに、大学での「学び」に重要なのは、自分の「知的生産の技術」を確立することである。かつて、梅棹忠夫の『知的生産の技術』（岩波新書）がベストセラーになったことがあるが、その本を読み返すまでもなく、自分なりの「得た知識」を頭のなかの整理棚に整理しておくやり方、その知識を使って「新しい知識を創造するやり方」を大学時代に確立することは大切であり、このことは大学を卒業した後で、とっても役に立つ。